

香港やタイにソ連の侵透工作さかん

この九月下旬、東南アジアへの出張の途次、四月ぶりに香港へ立ち寄り、この四ヶ月前のうちに、香港の書店や露上の雑誌売場に、ソ連の対アジア進出にかんするいわゆる軍事・戦略物の出版があつた。その出版のなかに、半ば興味本位にソ連の軍力や中ソ国境での防衛問題などをとりあげたものも多し、いわば中国公認の商務印書館や三聯書店でも、ソ修社会帝国主義の罪状集とでもいえるような本が並び、司馬列の『蘇聯問題集』（蘇古出版社）が最近によく売れているとのことであった。

もとより、イギリス香港政府は、香港が中ソ抗争の場になることには極度に警戒的で、ソ連船が入港しても、最近では乗員の上陸さえ許さないほどだが、中国系紙は、にもかかわらず、ソ連があらゆる手段を使って香港への侵透工作をおこなっているとは非難している。

つい最近、対中国外交正常化をおこなって一種の中国ブームを経過したばかりのパンクには、すでにソ連大使館や通商代表部があるだけに、状況はもと厳格である。はやくも去る七月二十二日、タイ共産党の機関紙「タイ人民の声」は、タイにおけるソ連の侵透工作を激しく非難し、「ソ連社会帝国主義は、貿易要員などの名目で公然とまたヘルをまたった秘密情報員を利用してスパイ、転搬、破壊活動に従事するまで、タイの内政に干渉し、さまざま宣伝をおこない、大衆組織を破壊している」と述べていた。

また、「この連中はタイの軍事・外交情報を取集するほか、南アジアに再入るための機密活動に従事し、マレー半島とインド洋地域に勢力を拡げられるように、その立脚点を探そうとしている」とソ連の工作を激しく糾弾しようとした。

私自身、今回の東南アジア旅行では、シンガポールからバンコクまで、約一週間の間に、マレー半島を汽車で北上し、途中、最近、共産ゲリラの活動のため相次いで戒厳令が発せられたマレーシアのペラ州、ケタ州に滞在した。この国境を越えたのが、右の「タイ人民の声」放送にかんするカシオのシニア・クマール・ルージュという記者である。またインド洋への出口であるペナン対岸のパタウ

アジアの流動と中ソの覇権抗争

中ソ冷戦の中の現実を認識しよう

イスラエルには私の滞在中、ソ連の大規模な輸送船が三隻泊しているのを目撃することができた。そのうち、パンクにまで知ったことである。最近、タイにおこなわれている工作が活発化しているとの報道以上に、ソ連の活動は華々しく、とくにパンクとチェンマイを拠点に、有力タイ語紙や大学関係に資金を出したり、タイの労働運動指導者をソ連に招いたりして活動が途絶えていて、これも一つの特徴である。最近、タイの内政に干渉し、さまざま宣伝をおこない、大衆組織を破壊している」と述べた。

また、「この連中はタイの軍事・外交情報を取集するほか、南アジアに再入るための機密活動に従事し、マレー半島とインド洋地域に勢力を拡げられるように、その立脚点を探そうとしている」とソ連の工作を激しく糾弾しようとした。

私自身、今回の東南アジア旅行では、シンガポールからバンコクまで、約一週間の間に、マレー半島を汽車で北上し、途中、最近、共産ゲリラの活動のため相次いで戒厳令が発せられたマレーシアのペラ州、ケタ州に滞在した。この国境を越えたのが、右の「タイ人民の声」放送にかんするカシオのシニア・クマール・ルージュという記者である。またインド洋への出口であるペナン対岸のパタウ

る状況が明らかである。もとより、このような事態をもたらしただけで、全欧安保会議を「危険会議」として非難した中国の主張のとおり、ヨーロッパの安定を基礎としたソ連の積極的なアジア進出の企図がある。しかも、中国はまさに「前門の狼を拒み、後門の虎を防ぐ」（人民日報）という状況証拠を去る三月の北米における江青講話に言及しているハノイへの「あすより」といった材料のみならず、いまやあらゆる面が強まってきており、このことは、アジアの中ソ抗争をさらに複雑化させざるにはおかない。最近の水産批判にも言及が、マレーシアの共産ゲリラへの

る状況が明らかである。もとより、このような事態をもたらしただけで、全欧安保会議を「危険会議」として非難した中国の主張のとおり、ヨーロッパの安定を基礎としたソ連の積極的なアジア進出の企図がある。しかも、中国はまさに「前門の狼を拒み、後門の虎を防ぐ」（人民日報）という状況証拠を去る三月の北米における江青講話に言及しているハノイへの「あすより」といった材料のみならず、いまやあらゆる面が強まってきており、このことは、アジアの中ソ抗争をさらに複雑化させざるにはおかない。最近の水産批判にも言及が、マレーシアの共産ゲリラへの



中嶋嶺雄

北京は何が何でも覇権事項はゆ保反対なきを再開することに本人がどういう意図から提案しているのかはわからないが、結果的にはそのように解釈されるのである。

だが、こうやって北京とモスクワに相互に譲歩を繰り返して、いかに、やがて日本は中ソの二重操作に巻き込まれる。どうやら中国の第ボヤンをかかた存念のだから、今後対ソ平和条約でもソ連の言い分を認める原因がある。

武器の新しい供給源は明らかにハノイになっていてと断言している。このような問題の真偽は確かめようがないにしても、東北タイからの中ソ抗争に近づくにつれて、中ソ対立の影を見る推測さえ可能なのである。左派の独立革命戦線は毛沢東主義者で、ポルトガルからの漸進的独立を唱えた民主同盟はソ連共産党に近いポルトガル共産党の影響下にある。これにインドネシア派の大衆民主協会が少数ながら組み合わさっていたという内乱の経緯は、ある意味で論理にかなっている。少なくとも、チモール内乱が中ソ抗争に結びつき、この小島にも中ソの覇権争いが及んでくるかもしれないという国際環境は現に存在しているのである。中国がソ連の「アジア集団安保構想」を激しく批判すれば、ソ連は、中国がインド洋上のジゴ・ガルシア島から日米安保にいたるまでアメリカの「新現状防衛構想」を支持していると論議する。

まさにこうして、今日の中ソ対立は、アジアの流動のたまたかであり、あらゆる意味でアジアの新しい冷戦Ⅱの中ソ冷戦と化している。統一と建設、インドシナ半島全体に冷戦Ⅱの中ソ冷戦と化している。冷戦Ⅱの中ソ冷戦と化している。冷戦Ⅱの中ソ冷戦と化している。冷戦Ⅱの中ソ冷戦と化している。

中ソ対立操作され論

田中首相がパンク二匹をもらって得意になっていたころ、日本の少数グループの間に、つぎのような深刻な懸念が表明された。

「日中国交樹立はアジアの平和のためとが、いらないきれいなことはいわれるが、要するに北京は日本を巻きこんで、ソ連に反共冷戦主義者、中国敵

中ソのロビイストが国内で暗躍しているのだから、結局中ソ対立を操作するつもりが、逆に操作されてしまうだろう。」

だが、こういう心配は、当時、のバカ騒ぎの中でかき消され、また見向きもされなかった。それが、このように意図を、露骨に見せているのである。

中ソのロビイストが国内で暗躍しているのだから、結局中ソ対立を操作するつもりが、逆に操作されてしまうだろう。」

だが、こういう心配は、当時、のバカ騒ぎの中でかき消され、また見向きもされなかった。それが、このように意図を、露骨に見せているのである。

おおきな存在になりつつあるハノイ

以上のようになると、アジアにおける中ソの覇権争いは、従

私がマレーシアのペラ州や都府に求めた、あるローカル紙の記事は、ついその日までタイ南部国境地帯を歩いたばかりだった。

南太平洋の一隅に生じたボル

（東京外語大助教授）